〈対談「今、倉橋を語る」〉の準備の中で

津守　眞（M）
津守房江（F）

二〇〇七年五月十九、二十日、十文字学園女子大学で行われた日本保育学会第60回大会で、「今、倉橋を語る」という題で、森上史朗先生との対談の機会が与えられました。倉橋惣三先生没後五十年以上たって、私共は懐かしく倉橋先生のことを改めて考えました。当日は森上先生による明確な保育思想の読み解きにより、現在と未来への意味を考えることができました。準備の中で思い起こされた倉橋ご夫妻の日常の私的なことなどが保育思想を裏打ちしているように思われ、津守房江と語り合ったことも含めて、いくつか心に残ったことを書き残したいと思います。

人はそれぞれに

M　私は昭和二十五年五月九日（火曜）晴、に平井信義先生に連れられて倉橋先生のお宅を初めて訪問しました。家に帰って書き留めたことをそのままに記します。

「この子供は、この子供だ。私は私であり、あの人はあの人、あなたはあなたである。将来どうなるか、そんなことは知らない。神様の御手に委ねなければならない」

昭和二十六年六月十一日、二度目の訪問では、「一度荒海の中にもぐらなければ泳げるようにはならない。高踏的に先人のあとをまねてもそれは偽物にすぎない。倉橋先生の児童観には尊敬するし共鳴を感じるが、それをそのままに生きていたのではきれいごとにすぎない。私は私なりに大いに考え、自分の道を歩もう。唯、目指すところはひとつであるが。我々の目指すのは真実を求めること。これにつきる」と記しています。

倉橋先生が書かれたものに私は感動するが、だからといって、人間崇拝に陥ってはならないということを、先生と語っていて心に刻み付けられました。

F 「この子はこの子。あの子はあの子」ということで、思い出すのですが、先生のご家庭には二人の男の子と、その下に女の子がおられました。長男は後に大成なさるのですが、子どもの時は慎重な性質で気が弱く、庭にあった玩具に石を投げさせようとしてもそれができない。ボールをあててごらんと言ってようやくやったという話を、歯がゆく感じた倉橋夫人から聞いたのを覚えています。その時先生はどうされたのですかと聞くと、廊下でにこにこして見ておられたとのことでした。先生は歌舞伎が好きで、そのころ朝日新聞家庭欄に書かれた「我が家の曽我五郎十

郎」の話はご家庭の話を歌舞伎になぞらえて書かれたものだと思われます。長男は慎重で、次男はやんちゃで。それぞれ個性の違う二人が協力することを言われたのでしょう。夫人が、「あれはとても評判がよくて…」と話されました。話を聞いた時は、夫人の育て方に私の関心は向いていましたが、今あなたの話で、子どもの個性と主体性のことだったかと思いました。人はその時聞いていても長い時間をかけなければわからないことがありますが、この出来事もそのひとつです。倉橋の思想と、それを支えてきた夫人の話とを重ね合わせるともっとよくわかります。

M　子どもの主体性だけでなく、自分自身の研究者としての主体性を心に刻んだのです。

日本保育学会創設のころ

M　昭和二十三年十一月二十一日に、倉橋先生が長年心に温めておられた日本保育学会第1回大会が東京女子高等師範学校附属幼稚園の遊戯室で開催されました。私は第1回は知りません。

第2回は昭和二十四年五月二十九日（日曜）に開催されました。私はそのころ、日曜日には矢内原忠雄先生の聖書講義に熱心に出席していたので、どちらに出ようかと迷いながら、結局、保育学会のほうに行きました。壇上に倉橋先生がおられました。日本保育学会の人たちと出会ってよかったと思いました。第3回の日本保育

学会は奈良女子大学で開催され、私は関西旅行をかねて行きました。第４回は昭和二十六年五月二十七日（日曜）にお茶の水女子大学附属幼稚園で行われました。

この時から女高師はお茶の水女子大学とかわりました。先生は児童学科の創設にあたられましたが、新制大学になった後は一切かかわることはありませんでした。私がお宅にお訪ねした時、いつも和服姿で籐椅子にかけて話される先生に私は『峻厳』を感じました。

今回、十文字学園女子大学での対談にあたり、ずっと前に亡くなったご長男の夫人、みどりさんと久しぶりに電話で話し、あのころの倉橋先生ご夫妻のことを懐かしく話し合いました。昭和二十六年に私がアメリカに行った時に先生から頂いた手紙の中に入っていた一枚の笹の葉と『おほしさま』とだけ書いた紙片のことが話題になりました。みどりさんは、倉橋先生が庭に行って取ってきたことを今もはっきりと覚えていますと電話口で話され、五十年以上昔のことを親しく互いに話すことのできることの不思議さを思いました。

F　倉橋先生が日本保育学会で話す講演草稿に手を入れているころ、私がお訪ねした時のことです。「わたしは産みの苦しみをしている」と夫人に言われ、「わたしだって三人の

子どもを産む時、産みの苦しみをしましたよ」と夫人が言い、「きみのは実体があるが、わたしは形のないものを産むのだから大変だ」と、玄関先での立ち話で、ご夫妻で笑い合われました。

保育の言語化は大変で、既成の理論ではうまくいかない。倉橋先生は詩的な言葉で表現されたものが多いのはこのためでしょうか。

バランス感覚

F　倉橋先生の夫人の名前は『トク（徳）』で、ご母堂の名前は『とく』でした。洋行中、夫人とご母堂とが手紙を巡って波立った時、先生は両方に同じように手紙を出した（妻と母と同名で同居していた。夫人には『徳子どの』と記し、ご母堂には『とく様』と記した）。どちらも切り捨てることはできない。夫人は一緒に生きている者として活力があり、言いたいことをスパッと言う。先生はどちらにもよくしたい。『どの』が多くなるとご母堂は機嫌が悪く、倉橋先生はバランスをとって両方によくされた。この話は何度も聞きました。これを話すのは夫人にとって楽しい思い出だったのでしょう。倉橋先生は一人っ子で、母親の思いがどちらに向くかによって子どもの思いも変わることを身を以て知っておられたのでしょう。第二次世界大戦中、日本は愛する祖国であり、それが負けるのは口惜しいと思い、同時に世界も愛したのも同様でしょう。両方を愛するという点で、感覚としては似ていた

のだと思います。

M　倉橋のバランス感覚は、ひとつのものを絶対的としないで、相対的に見るところに根源があるのでしょう。バランス感覚の根源です。

逆風の中で

戦時中、倉橋先生は自由主義者と言われ、社会的に辛いことが多くありました。幼稚園という名称も、変えるようにと軍部から迫られたこともあったと聞いています。しかし、フレーベル以来のキンダーガルテン（子どもの園）という名は守り続けられました。幼稚園は子どもが遊ぶ場であることは揺るぎませんでした。『子供讃歌』二一二頁には、戦時中、海軍経理学校の同窓会で児童教育の講演に行った時、記念帳に、「さゝ舟の行くへやいづこ春の海」と殴り書きされたことが出ていますが、先生の柔らかな抵抗とでもいえるでしょう。戦後、子育てについて、特に祖父母は自立心を損なうという論が強かった時も、それに対して先生は正面から反論しませんでしたが、その言説には明らかに反対の思いをもっておられました。

それから何十年もたった現在も、育てることの基本は「自ら育つものを育たせようとする心」であることは変わっていません。さまざまな逆風を受けながら真に大切なものが新しいものとして受け継がれていくことを、私共は目の前に見ています。

（保育研究者）